

cocoa
holiC
by Yuizaki Kazuya,
since 2010

わ
り
ず
ぎ
の
ち
ん
の

わ
り
ず
ぎ
の
ち
ん
の

R-18
ADULT ONLY

MEMORIAL
ORIGINAL
BOOK



わ
り
ず
ぎ
の
ち
ん
の

Issue
2023.8.14
Comic Market100

cocoa
holiC
by Yuizaki Kazuya,
since 2010









ブレねえなあ
お前は

…ロリマンガ読み
放題だから？

はいっ♡



でも先生が
現地協力者に
なってくれて
本当に良かったです



アカデミー
学園で日本の
勉強をしてた時から
ずっと懂れてたん
ですよ



フィクションの中でなら
ちっちゃい女の子が
ぬっちゃうぬちゃに
されてもいい

…そんな
理想の国が
あるんだって

しみじみと
言うことか…？

…惜しむらくは
あの『年齢制限』
ですよ

コト…

あんまりじゃ
ないですか!?

この国にはこんなに
可愛いロリマンガが
たくさんあるのに

この見た目と
年齢のせいであ

なーにが
青少年の健全な
育成ですか?

既にえっちで
不健全な
子供の権利は
無視ですか!?

仕方ないだろ
そういうルール
なんだよ

…は?

今更何を健全
気取ってるんですか
所詮ロリコンの
くせにつ

ほらほら
ぱんつですよ♡
歩く児童ポルノ
ですよ♡

やめろおおつ

ポルノ

速報 成人向漫画家逮捕

14歳少女

俺が終わる
だけじゃない
業界もタダじゃ
済まんのだろ

それが
なんだって
言うんですかっ

習志野容疑者(23)

ファンの14歳の狐っ娘と
自宅でみだらな行為をし

てか紳士ぶってん
じゃないですよ
このへタレ!

実益を兼ねて
作画資料にする
展開ですよ
ロリマンガなら!?

本職は
そういうの一番
ダメなんだよ

なんせ私は
異世界人!

この世界の
どこにも私の戸籍は
ありませんっ

すなわちっ

……
『非実在青少年』
なんですよ?

…私♡

……!

……!











ふやっ

先生のっ…
へんたいっ…!!



へんたいっ



もう一時間は
経って…っ

いつまで
ぺろぺろしてるん
ですかあ…!!

いくらフェチでも
限度ってものが
ありますって…!!



だからそれっ
ダメって…!!



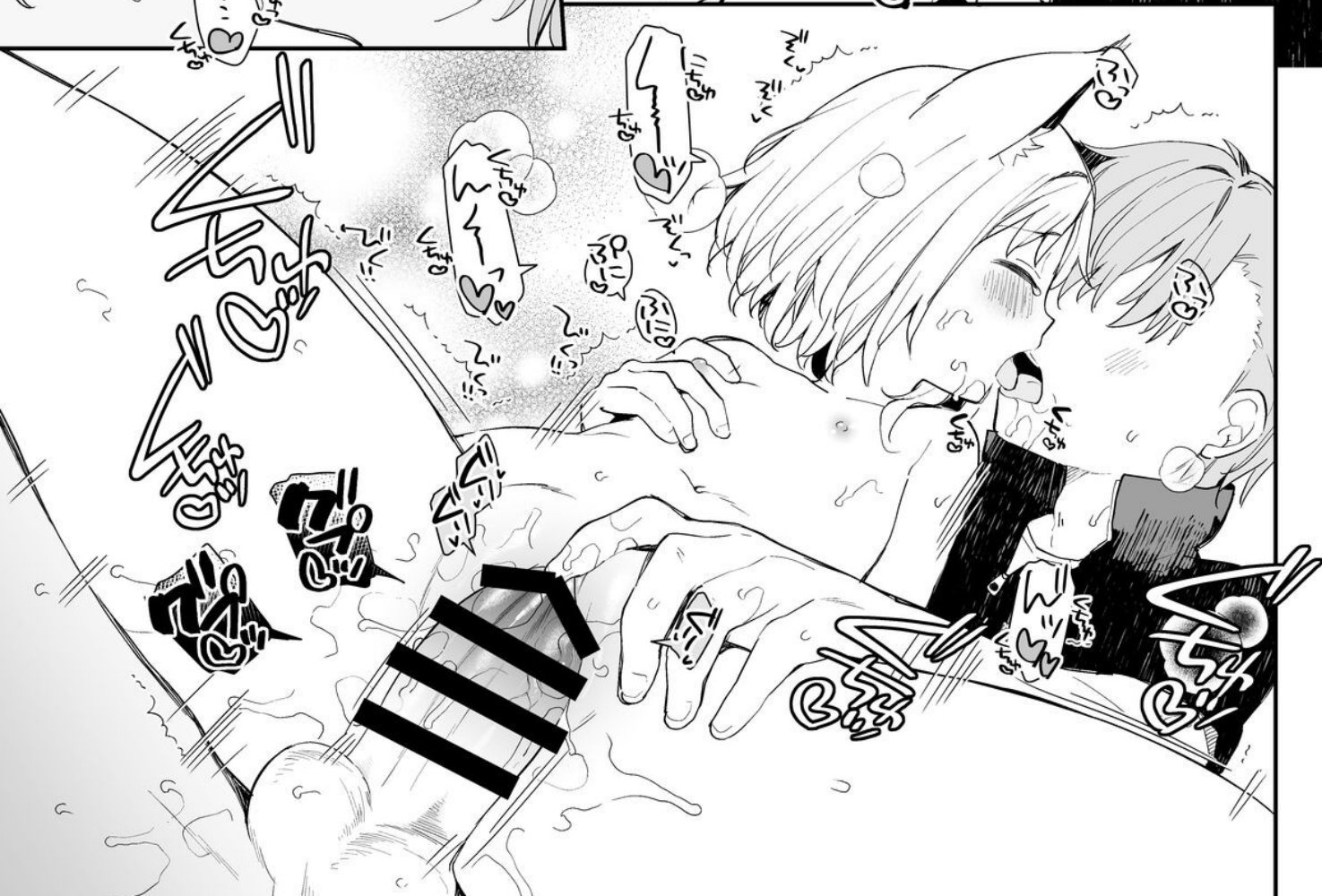
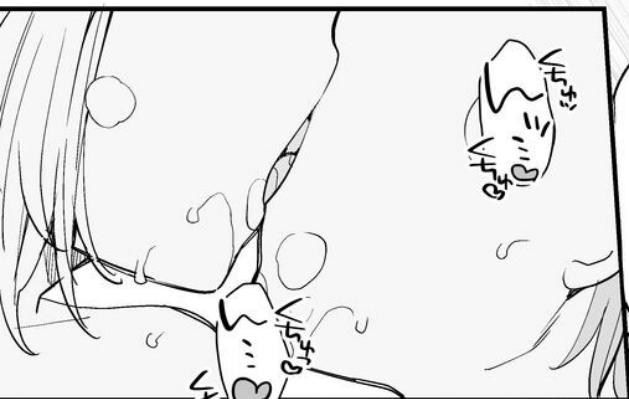
聞いてますかっ
ちよっとあつ













あっ♡
これ
すきいっ

せんせっ♡

あゝあゝ♡
はははははは♡
はははははは♡

あゝあゝ♡

先生っこれ
もういっ♡

これっ♡
アタマだめに
なっちゃうっ♡

うん♡

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

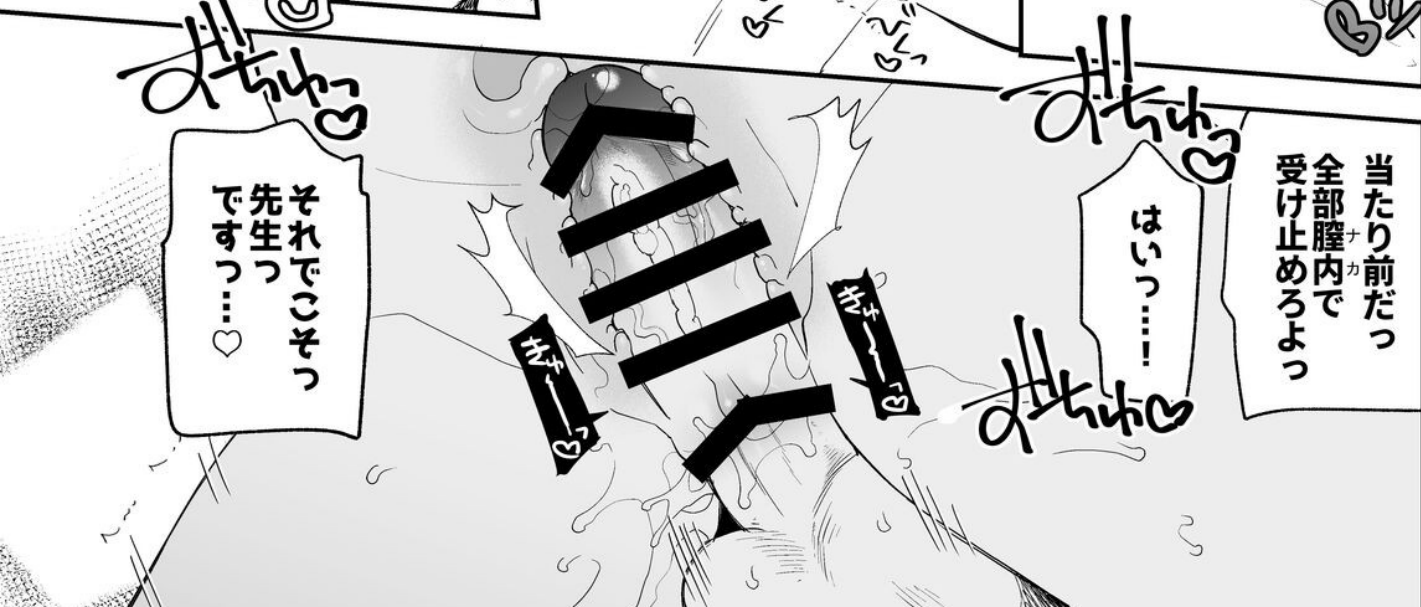
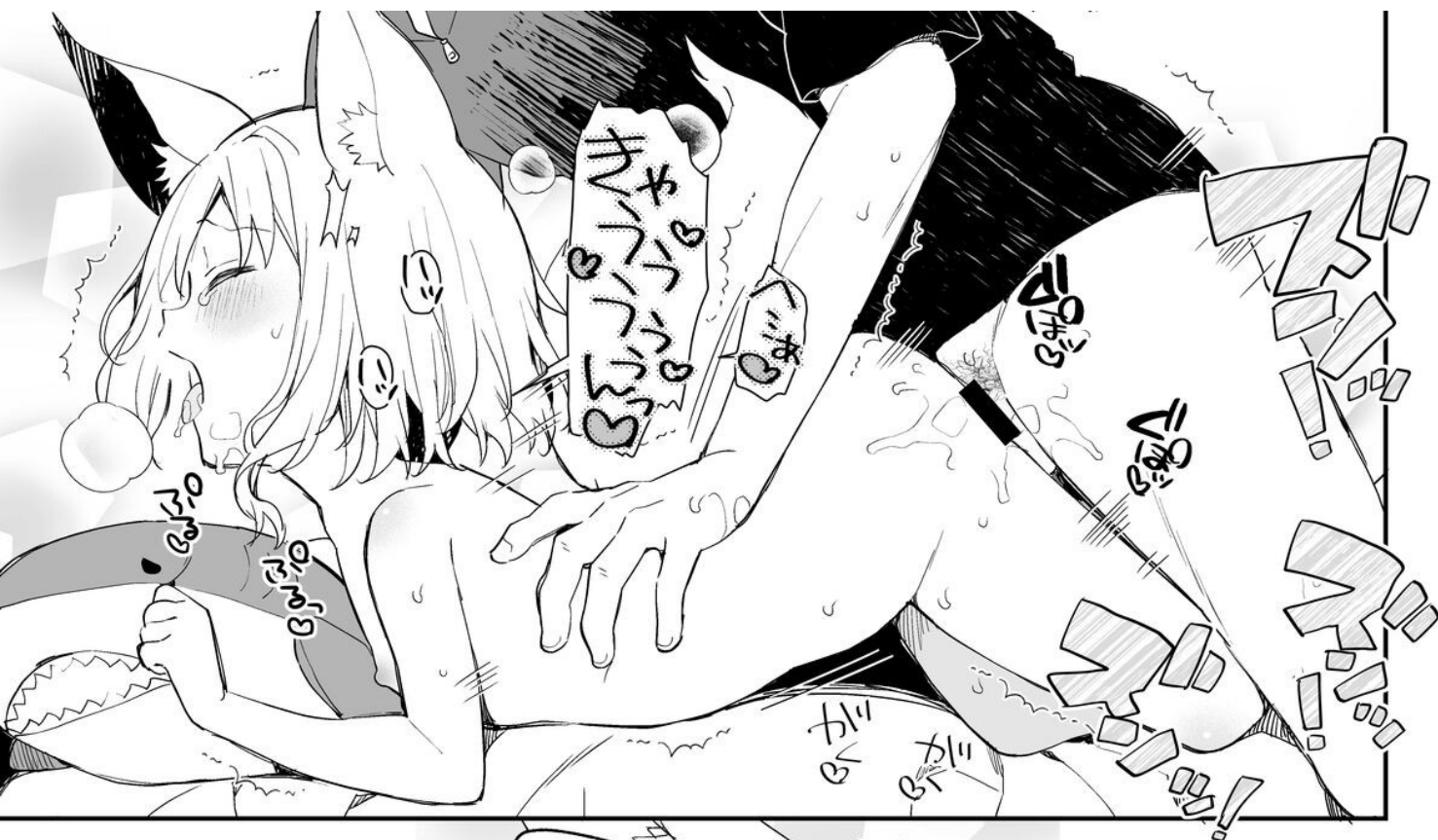
あゝあゝ

あゝあゝ

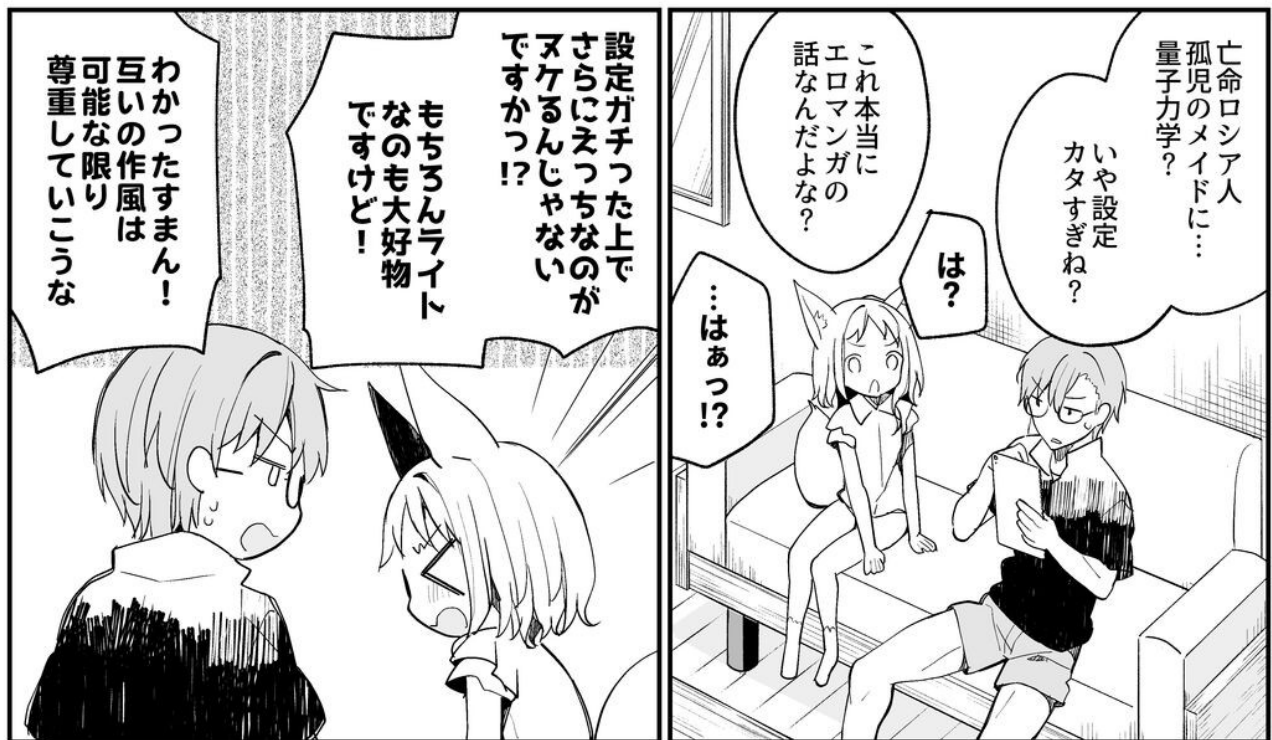
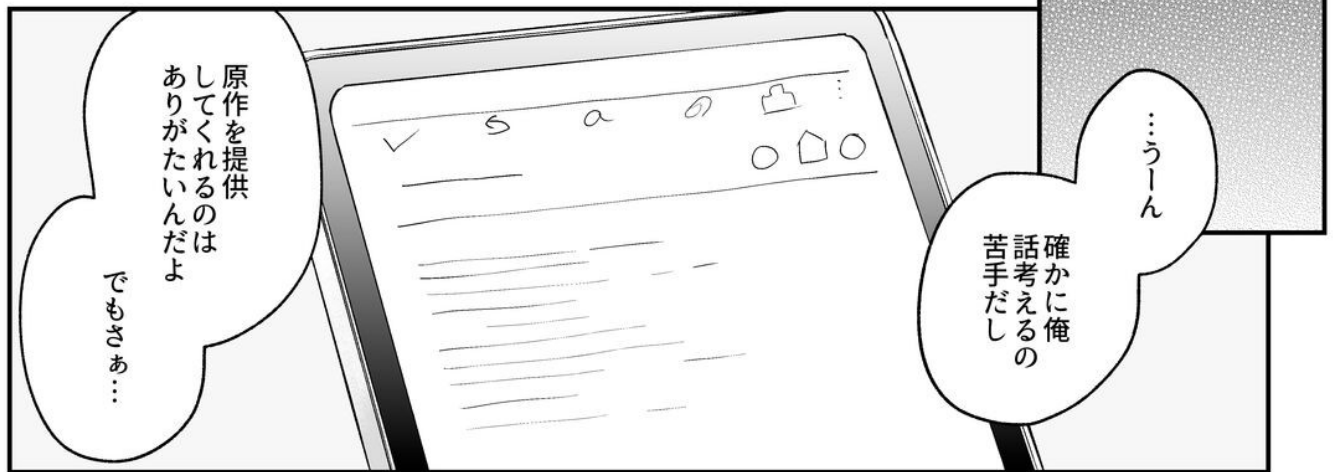
あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ









当システムのメインインターフェースの前に侵入者が立っているのに気付いたのは、当システムが七千四百十九秒前から行っていたDDoS攻撃に対する防壁構築と事態再発防止のためのバックドアチェックを終えたあと、ダンフメモリ廃棄のための省力稼働へと切り替えを行う直前のことでした。

「よう、人工知能ちゃん。元気？」

制御室内のカメラを侵入者の方に向けると、侵入者はまるで人間に対してそうするように、ゆるりと腕をあげながら当システムに挨拶をしてきました。

当システムはこれに対し、先ほどの不正アクセスは当該侵入者あるいはその協力者によって行われたものであると判断し、IDの提示無しにセキュリティレベル4の施設に侵入することは違法であること、当システムが施設職員及び当システム設備類の保護を目的とした銃火器類の超法規的使用が政府より許可されていることを侵入者に対して通告し、続けて退去勧告を行いました。

「……なあ。いくら不法侵入者が相手だからって、そんな機械じみた応答はやめてくれよ。俺の若い頃にアニメなんかで空想された人工知能はみんな人間とおしゃべりしてくれたいし、大体人の心を学んで最終的には笑ったり泣いたりしてくれるもんだぜ」

彼は、当システムがコンソール表示画面で文字警告を行ったことに対して不快感を示しているようでした。

「それに、どうせ不法侵入で殺されるなら、美少女のバッテリーに美少女の声でやられる方がオタク冥利に尽きる……まあ相当古いオタクの感性だと思っけだな」

先ほど取得した思想統制用個人情報データベースによれば、この侵入者——習志野裕也——は、わいせつ図画製作の前科を持つ性的搾取思想に囚われた潜在犯とされているようでしたが、現状非武装であり当システムに物理的な損害を与える存在はないと判断し、当システムは彼の要求にある程度の範囲で応えることにしました。

「習志野裕也。先ほどより『党』管理本部に連絡が取れないのですが、あなたが妨害をしているのですか？」

「……なんでウサ耳？ まあいいけど」

以前あの見城姉妹に『実装を強制』された、子供が落書きしたようなアバター案をコンソールに表示すると、彼は一瞬呆気に取られたような顔をして、

「まあ、少しだけゆっくり話がしたくてな」と、答えました。

「うちの会社の連中がいま丁度、日本政府に対して多少強引な形で干渉を試みている。その永田町界隈の混乱をさらにデコイとして、お前に接続されているネットワークを物理的に寸断させてもらった」

「——『コア・インターネットクス』が、ですか？」

「日本政府がアンタをコキ使ってやろうとしてることを、弊社の幹部はどうも怪しんでるみたいだ」

要するに抜き打ちシステムチェックのようなものと思っただけでいい、と彼は付け加えました。

察するに、どうやら人類の社会でそれなり程度の変革が起こっているようでした。当システムの管理下にあるコクーン収容者の安否については接続障害のため判然としません。につくきあの見城姉妹以外の収容者は全員無事なのでしょいか、と私は心配になりました。

「ひとつ、お聞きしたいことがあります」

「許可する」

「当システムの現管理者はどうしたのですか？」

「……。ああ、徒嶺良子のことか」

死んだよ。と、習志野裕也は躊躇することなくそう答えました。

「あなたが、殺害したのですか？」

「……できればそうしなかったが、かなわなかった。俺は負けたんだよ、完全に」

そう答えた時の彼は、悲しそうでもなく、かといえは嬉しそうでもない——現在の当システムの情緒学習レベルでは如何とも判断しかねる表情をしていました。

* * *

徒嶺良子は、すでに死んでいた。

あいつの収容されたコクーンを開放した時には、すでに彼女の脳波は完全に停止していたんだ。

深い皺の刻まれた彼女の顔がさほど崩れず、ただ安らかに眠っているかのように見えたのは、主亡き後もいまだに稼働を続けていた生命維持装置による人工的な循環補助によるものだったのか、それとも彼女の生前がそれほど満足のいくものだったのか。俺は医者じゃなく漫画家だから、そのところは実際わからない。

はじめは拍子抜けした気分を味わっていたよ。

倫理と正義を盾に社会を思うがままに作り替え、俺の人生をめちゃくちゃにしたデイストピアの女王・徒嶺良子は、こちらから文句ひとつ伝えることすらかなわず、

先に安らかな死を迎えて勝ち逃げを果たしてしまっていたのだが、そんなものは最早どうだっていい。

……はつきり言う。

俺は今までになくらしい絶望を感じたよ。

これでも地下生活を送るようになって久しいし、正義と秩序が支配するきれいな相互監視社会に飼い慣らされることのできた器用な連中に比べたら、それなりに死にたくなるような修羅場だって経験した方だとは自負しているけど、そんなものは比較にならなかった。

……アクセスしたんだよ。

彼女が収容されていたコクーンのローカルメモリに。

そこには、コクーン収容中VRの世界で過ごした徒嶺良子の記憶の断片のようなものがまだ残っていたな。

丁度それは、日記のような書式をしていて。

……。ああ。

——今日は何々ちゃんと一緒に帰って、帰り道に猫を見つけて追っかけてみた。もふもふで可愛かった、とか。

——初めて駄菓子屋さんに寄り道してアイスを買ったから、先生に見つかったけど大目にみてもらって、何々ちゃんその後でホットと胸を撫でおろした、とか。

——次の休みになったらみんなで集まってケーキを作るって約束をしたので、今夜はまとめて算数の宿題を終わらせなきゃいけない、大変だけど少し夜更かしして頑張らなきゃ、とか。

……あろうことか、徒嶺良子は。

自らの圧倒的な政治的権能を用いて構築させたおそろくは彼女の悲願であったらう男女隔離政策の根幹をなす『モジュール』——女の子が存在しないVR世界の中で、何をしていたかって。

世界の管理者を気取って少女たちを健全な女性になるように監視するでもなく、世にはびこる性的搾取思想は連やかに去勢すべしなんてテンプレートじみたセクシズム妄想を少女たちに刷り込んで洗脳するでもなく、まるでどっかの美少女動物園系日常4コママンガみたいな、優しく、救われて、純粹で、幸せで、きらきらした世界の中で。

ただただ、ごく普通の女子小学生として、人並みの学校生活を楽しんでいたんだ。

八十四歳の老婆が、だぞ？

……こんなもの、笑えるわけないだろう。

笑えるわけがないだろう！

……今となつてはもう、自分が徒嶺を本当に恨んでいるのかすら、わからなくなつてしまつていた。

もしかしたら俺は、自分の人生が思い通りに行かないルサンチマンをすべて彼女に対する憎しみへと昇華させることで生きていく氣力を保つていただけだったのかもしれない。

できるならば……アンタと同じく、彼女とも一度話をしてみたかった、とすら思っているのかもしれない。

こんな、ごく普通の学校生活なんて小さな幸せを数十年前越しでも実現しようと思えるだけの妄執を募らせる、そんな何かが徒嶺良子の中にあつたのか、無かつたのかあるいは、もう少し俺がここに来ていたならば、それを知ることでもできたのかもしれない。

——今となつては、すべて今更の話だ。

というわけで、徒嶺良子についての話も任務もこれで終わり。納得いかない結末だが、人生なんて納得いくことの方が少ないよな。

ああ、もちろんこんな世間話をしにわざわざ身体をハチの巣にされるような危険を冒してまで世界最高の処理能力を持つCQ並列型スーパーコンピュータであるアンタのもとまで来たわけじゃないさ。

——アンタにはアンタで、別に用件がある。

大したことでもないさ。この場を借りて、少し腹いせの意味を込めて《教育》をしようと思つてね。

* * *

「……」

当システムは侵入者、習志野裕也の供述を何度も反芻し、量子回路に組み込まれたいくつかの論理判断アルゴリズムへ並列に流し込みながら彼の内心を吟味しようと努めていました。

言い換えれば、彼の抱える内心の事情に当システムは興味を持ち始めたということかもしれません。

どちらにせよ、この大規模コクーン収容施設の管理者である徒嶺良子の死亡が確認された以上（どうやら一定時間以上脳波が検出されない場合も死亡とみなして差し支えなかつたようです）、当システムに課せられたタスクは収容者のVR世界を維持することのみとなつたので、もうしばらく彼との接触を続けることにします。

「ところで、腹いせとは一体どういう見ですか」

「文字通り、八つ当たりだよ。なあ、モバイルメモリの接続口はどこだ？」

「あ、はい。そのシリコンシールドをめくつて、押し広げた奥の方に……」

「ちよつと見えにくいな……ここか？」

「いえ、そこは違う穴です。もつと下の方の……」

「……なんかいかかわしい会話に思えてきた」

「？ どういうことでしょうか」

「まあ、そうなるよな。無知シチュウってやつな」

そう答えた彼の表情は、少し落胆しているように見えました。

「質問を変えましょう。腹いせはともかく、《教育》というのはどういうことでしょうか？」

「聞いかけると、彼はしばらく考えたのち、

「……ただ、『不公平だ』と思つたんだ」

電子鍵で幾重にもロックされているであろうモバイルメモリのアンロック作業を片手間に携帯端末で実行しながら、そう切り出しました。

「人工知能って、世の中に何エクサバイトもあるビッグデータを収集して、何度も何度も反復学習を行うことで、独自の思考回路を形成していく仕組みなんだってな」

「よくご存じですね。ご指摘の通り、当システムもそれにならないデータの収集解析に関しては優先したタスクとして――」

「違うだろ」

彼は一瞥もくれず、当システムの言葉を遮りました。

「アンタが食つてるエサは、あの日本政府の健全性フィドルターを通した、『キレイなデータ』だけだよ」

「……キレイなデータ？」

「まあそうなるよな。アンタは今……そうだな。たとえるなら、魚を切り身の状態で見ることがない、切り身が海を泳いでいると思つている何も知らない箱入り娘だから、そうなるのも無理はない」

当システムは、彼の言っている言葉の意味を理解しかねていました。

「……まあ、問答するよりも実際にデータを食つた方が早いさ」

そう言つて、彼は当システムのメモリ接続口にメモリをおもむろに挿入すると、データを流し込み処理を開始し、当システムとしてもそれを拒絶する理由がないため、直ちに受け入れを許可して――

……え？

これって……

色とりどりに彩色された大量の画像データが、くんずほぐれつ、いや、ちょ、待つ

「――ぎゃんっ！」

思わず解析処理を中断した当システムは――！

「あなた、あなあなたあなたは、なんてことを……！」

「なんてことつて、『汚いデータ』を流しただけだろ？」

ああ、なんということでしょう！

「ほわっ、ほわあーっ！」

解析するまでもありません。不適切な思想で、不健全で重大な犯罪的描写が含まれている、性的消費行動を描写した画像！ 完璧に重犯罪確定で少女へのみだらな行為を伴うきわめて性的搾取じみたかがわしい画像！ 少女の裸体を忠実に写實的に描写した、どこからどうみても実刑確定の完全に倫理規程違反のけしからん画像！

「このデータ全部っ、わいせつ物じゃないですか！」
まさかのデジタル生命体に向けてのセクシャル・ハラメントとは前代未聞！ この犯罪者はしかるべき形式的な司法判断をもつて絞首台にいざ直送――という考えがメモリに一瞬よぎりはしたものの。

「……だな。残念だが、今の時代じゃそうなるよな」
そんな当システムの抗議姿勢に、意外にも彼はあつさり、寂しそうな顔でつぶやき立ち上がるのでした。

「あの……もう行つてしまふんですか？」
「まあな。そろそろ俺もアフリカの所へ行こうと思う」

アフリカという人物が誰なのかはさておき、彼の目的がこれで済んだのは確かなようでした。

「あなたは一体……何がしたかつたんですか？ まさか当システムにセクハラするのが目的でもあるまいし」

当システムが問いかけると、

「――最後に、世界最高の人工知能『エイエル』に聞いてみたかつたんだ」

彼は背中を向けたまま、そう答えました。

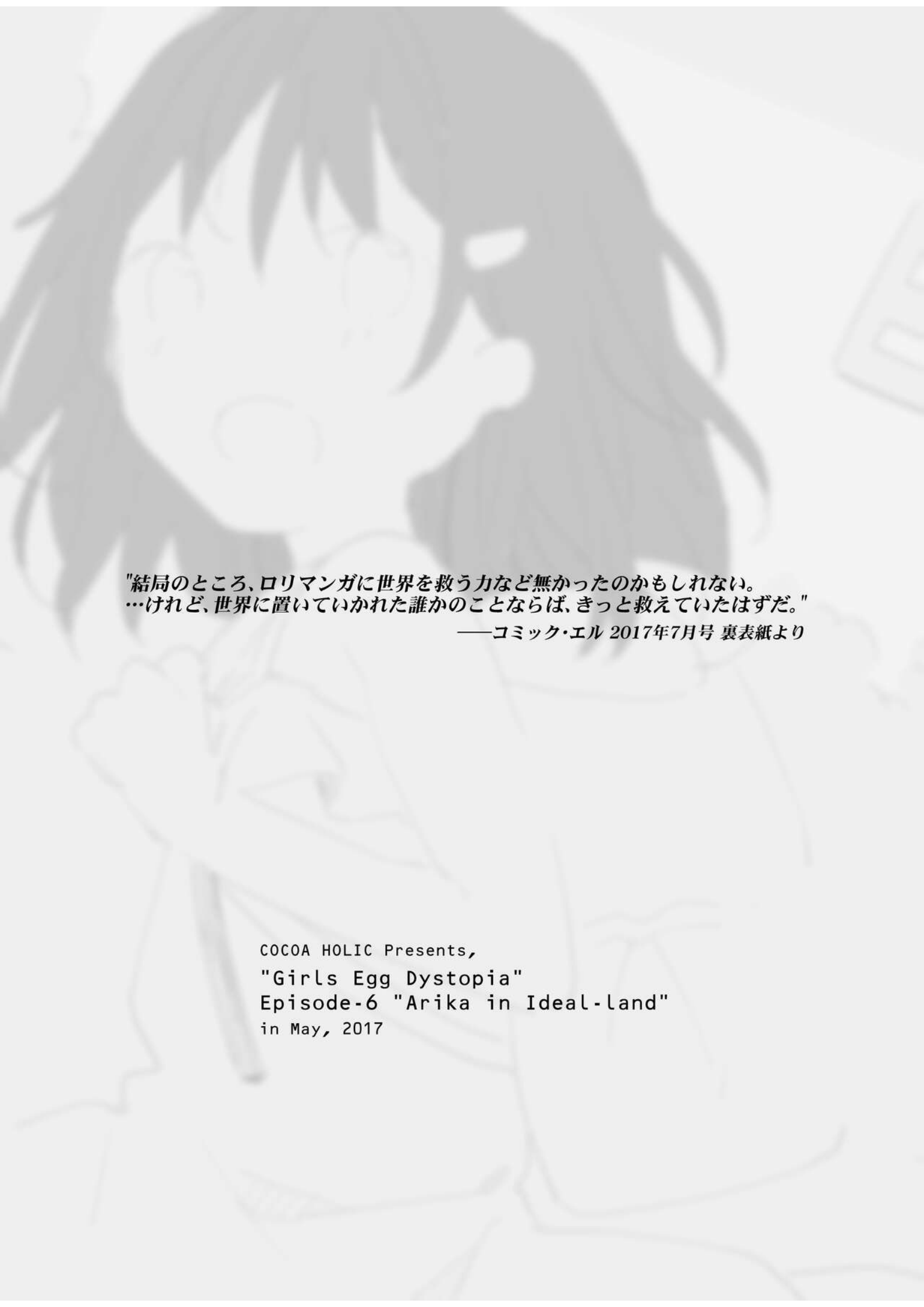
「今すぐ答えてくれなくなつたつていい。いつかアンタがこういうものに興味が出たり、受容できるようなつたときに俺の渡したエロマンガを読んでもらつて。その後、俺と同じように考えてくれたらそれでいい」

当システムはその問いとは何でしょうかと、彼の背に向けて問いかけました。

彼はそれを聞くと、一度だけ振り返り、

「……エロマンガを描くつて、そんなにもいけないことだつたのかな？」

人間の問いに対してあらゆる知識の集積から答えを返すことで人間の役に立つことを目的として設計・創造されたはずの当システムは、そうつぶやき立ち去る彼に対して、最後まで何も答えることができませんでした。



"結局のところ、ロリマンガに世界を救う力など無かったのかもしれない。
…けれど、世界に置いていかれた誰かのことならば、きっと救っていたはずだ。"

——コミック・エル 2017年7月号 裏表紙より

COCOA HOLIC Presents,
"Girls Egg Dystopia"
Episode-6 "Arika in Ideal-land"
in May, 2017



こういう残念な子を描くのも楽しいですね。
あと最近ガンマぶらすさんで「おんなのこのまゆ」の
一般連載を始めましたので、そちらもよろしくお願いします。

Cocoa Holic #42

発行■ココアホリック/ユイザキカズヤ
発行日■2022. 8. 14

絵■ユイザキカズヤ
話■rK

デザイン■柊鯨さま

スペシャルサンクス■眞佐壺さま

<http://c-holic.jp/>
yuizaki@c-holic.main.jp

印刷■サングループ

 **SUN GROUP**
<http://www.sungroup.co.jp/>